

令和7年度 学校関係者評価報告書

大阪市立聖賢小学校学校協議会

1 総括についての評価

聖賢小学校が多くの課題を抱えていることを理解した。そのために、教職員間や地域、関係諸機関との連携大切にした取り組みを継続している。効果がすぐに表れるもの、そうではないものもあるが、粘り強く取り組んでいる。時代背景も、昔と異なり、難しさもあるだろうが、教職員一人で解決しようとするのではなく、共通理解のもと、方針を立てて教職員全体で進もうとしていることが大切である。

学校教育は、教職員の地道な努力の積み重ねが必要である。一人一人の児童の実態を把握しながら継続した取り組みを続けることが教職員の役目である。だからこそ、各数値は気になるところだが、児童の成長している点を見出して、さらに伸ばしていくこと、課題となる原因を調べ、その対応を考え実践を続けることが、児童の育ちによい影響を及ぼすと考える。

2 年度目標（全市共通・学校園）ごとの評価

【最重要目標1 安全・安心な教育の推進】

- 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を78.0%以上にする。
(令和6年度 77.0%)
(令和7年度 83.5%)
- 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。
(令和6年度 2.82%)
(令和7年度 5.29%)

- いじめは、学校で最も最重要課題であると考え。児童が楽しさやおもしろさを追い求めてしまうことが、いじめにつながるが多い。学級の児童をいじって、相手の反応を楽しむ姿が、児童にはよく見られる。その雰囲気を感じて、「止めること」「指導すること」が教職員の役目ではないかと考える。学校側は、多くの課題を抱えていることは承知しているが、保護者は、学校内のことは見えないので、そこは校長が中心となって、児童が教室で安心できるような場所になるよう今後も取り組み続けなければならない。教職員の態度がやがて児童の意識を高めることにつながる。
- 年々、不登校児童が増加傾向にあると聞くと、学校への不信がつってしまう。児童同士の関係や担任との関係、学習指導のあり方などを見つめ直したり、児童の声をしっかり聴き取り相談できる相手となったりすること必要ではないか。また、昼夜逆転の児童もいることなので、そこは家庭内のことになるので、規則正しい習慣を守るよう、保護者にしっかりと子育てしてほしい。

【最重要目標2 未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を38.8%以上にする(令和6年度 37.8%)。
- 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント向上させる。
国語と算数については、令和7年度は、
国語：4年 100.0%→100.2%、5年 99.8%→99.2%、6年 96.4%→98.3%
と6年以外は1ポイント向上しなかった。
算数：4年 100.2%→101.1%、5年 98.5%→99.7%、6年 98.4%→100.9%
と1ポイント以上向上した。
- 令和7年度の全国体力・運動能力、運動習慣等における体力合計点の対全国比を男女とも1ポイント以上向上させる。
(令和6年度男子 95.7%→令和7年度 90.0% 令和6年度女子 91.1%→令和7年度 94.8%)

- 「主体的・対話的で深い学び」と前から言われている。学校側が多様な手立てを打っているが、まだまだ効果が見られないということだった。自宅で一人で勉強しているのではなく、学級で学習をしているからこそ、教えたり、教えてもらったりしながら、自分の考えだけでなく、他の人の考えを聴いて、気づきが生まれるような学習をするための手立てを考えることが必要である。
- 児童の学習の実態を把握して、どこで躓いているのか、そこをどのように解決していくのかを学年全体、学校全体で共有して、学習指導を継続してほしい。学び続ける子は、「荒れることはない」という言葉を聴いたことがある。そのような学校にしてほしい。
- 体力については、男女間の差があったように感じた。体育科の学習だけでなく、休み時間の活用などで、体を動かす楽しさを味わわせるように取り組んでいる。体育科の学習では、陸上や器械運動、ボール運動などがあると聞いているので、その運動で技や記録を追い求めるだけでなく、運動の何を伸ばそうとするのかを理解した上で指導していくことを必要でないか。

【最重要目標 3 学びを支える教育環境の充実】

- 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。(ただし、事務局が定める学校行事等 ICT 活用が適さない日数を除く)
(令和6年度 7.81%→令和7年度 14.4%)
- 「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1を満たす教員の割合を57.7%以上にする。(令和6年度 56.7%→令和7年度 79.6%)
(基準1：ア、1か月の時間外勤務時間が45時間を超えないようにすること、イ、1年間の時間外勤務時間が360時間を超えないようにすること)
- 令和7年度末児童アンケートの「いろいろな国や地域の文化や伝統などを含めた体験型学習を学ぶ機会が多くありますか。」において肯定的に答える児童の割合を75.1%以上にする。(令和6年度 74.1%→令和7年度 71.4%)
- 昨年度と比較して、学習用端末の使用率は、上がってはいる(1月末時点で、72.1%)。しかし、心の天気や教科学習における活用に教員による差があることは否めない。よって、活用させることが、学習に役立ち、有効であることを教員自身が実感をもつことが必要であると考えます。
- 働き方改革については、勤務外の時間は減少しているが、それが児童の成長によりよい影響を及ぼしているのかを見定めながら、「時間短縮」より「やりがいのある職場」にすることが大切ではないか。
- 体験学習は地域からの支援もあって取り組むことができている。日頃の学習ではできないことを体験させることで、文化や伝統を学ぶことができる機会であることを理解した上で、継続していくことを望む。

3 今後の学校園の運営についての意見

聖賢小学校の課題は、大阪市全体の課題でもある。だからこそ、教職員全体でしっかりと取り組むことは当然である。特に、「いじめ」問題については、最重要課題と考える。「いじめ」はなくならないからこそ、「いじめを許さない」教室、学校であることを教職員自らが態度で表し、児童にも継続して指導していくことが大切である。

児童が安心して教室で学習できる環境、集団での学習するよさを味わえるように継続することが必要である。